

「脳性麻痺児へのボバースアプローチ 上級講習会」レポート

2017年8月9日(水)～8月13日(日)の5日間で、「脳性麻痺児へのボバースアプローチ 上級講習会」が当院にて開催されました。

本講習会は、八週間の基礎コースを修了したセラピスト向けの講習会で、全国でも大阪発達総合療育センターか小茂根の心身障害児総合療育センターといった限定された病院でしか開催されてこなかった講習会ですが、今回当院で初めて開催されました。日本にボバース概念を導入し、長年にわたって多くのセラピストの育成に尽力されている紀伊克昌先生をコースリーダーとして、アシスタントには、現在日本のみならず、中国でのセラピスト育成にも尽力されている新保松雄先生が来て下さいました。当院のインストラクターである丸森を始め、順天堂大学医学部附属順天堂医院の北原先生や心身障害児総合医療療育センターの増淵先生もアシスタントとして入って下さいました。受講生も、北は山形から南は広島・高知・愛媛、と全国各地からPT・OT計23名が集まりました。地域を代表する中核病院からの参加が多く、意識もレベルも高いメンバーでの充実した講習会となりました。

上級講習会2017(東京小児療育病院)

	8月9日(水)	8月10日(木)	8月11日(金)	8月12日(土)	8月13日(日)
9:00	東京小児療育病院院長挨拶	講義&実技	講義&実技	講義&実技	講義&実技
9:30	講義:ボバース概念 自己認識と課題	ファシリテーションの理論 と実技 Stop Standing!	Top Down Facilitation 座位でのリーチ と 機能的非対称活動	講義&実技 正常発達解釈	Postural Control pAPA / aAPA
10:00					
10:10	講義:近代ボバース概念 New Classification と感覚系				
10:30		講義&実技 Postural Control と Bottom Up	講義&実技 Top Down Facilitation 長座位と側臥位	ワークショップ I Case 討議 治療の理論的解釈	講義&実技 遠位端感覚系とBOSとCHOR
10:40					
12:20	昼 休 み				
13:20	講義:臨床推論と デモンストレーション I	デモンストレーション II 討議 治療の理論的解釈	講義&実技 Top Down Facilitation	ワークショップ II Case 討議 治療の理論的解釈	治療実習 IV Case①～⑧の8例
15:00	治療実習 I Case①～⑧の8例	治療実習 II Case①～⑧の8例	治療実習 III Case①～⑧の8例	ワークショップ III Case 討議 治療の理論的解釈	今後の自己課題 閉講コメント
15:20					
15:30	GAS (Goal Attainment Scale)				
17:00		フィードバック	フィードバック	フィードバック	
17:30					

講義では、「New Classification と感覚系」「Facilitation の理論」「Postural Control と Bottom Up」「Top Down acilitation」「座位でのリーチと機能的非対称活動」「長座位と側臥位」「正常発達解釈」「Postural Control pAPA/aAPA」「遠位端感覚系と BOS と CHOR」等を学びました。講義と関連した実技等を2～3名一組となって受講生同士で練習、初日と二日目には講師の先生による実際の患者さんの治療を見学するデモンストレーションがあり、グループ毎に臨床推論を行いました。初日から最終日まで実際に患者さんの治療を行っていく治療実習があり、2～3名一組となって適宜講師の先生方の指導を受けながら治療を進めていきました。四日目には、受講生と講師の先生方の前で患者さんに来ていただいて治療を実際に行い、講師の先生の指導を受けたり他の受講生達とディスカッションするワークショップもあり、中身の詰まった五日間となりました。



講習会終了後にいただいたアンケートでの受講生の声を一部紹介させていただきます。

- Core Stability の重要性や postural control の本当の意味の理解が浅かったことに気づきました。CHOR もかなり雑な捉え方をしていた自分に気づきました。Kinetic chain を感じられる触り方ができるようになりました。知識を知識で終わらせては何の意味もないことに気づかされました。
- 患者様への入力の基本（触れ方、圧のかけ方、声掛け等）を頭でわかっていたつもりでしたが、力まかせにやっていたことがよくわかりました。また、末梢の操作は単なる mobilization ではなく、core を高めていけるものであるべきで、その変化もしっかりとセラピストが認知しなければいけないということがよくわかりました。今までの自分のセラピーで欠如していたところを認識できました。
- ハンドリング時に反応をうまく感じ取れない。神経生理学の理解、観察の不十分さ、等々まだまだたくさんあります。学術的文献を参考に理論の理解、ケース検討、スタッフ同士で観察や学んだ実技について取り組みたいと思います。
- ハンドリング技術の向上と子どもが何を訴えているのかより細かく全身を使って感じていきたいと思いました。Active な反応をもっとたくさん出せるように日々取り組んでいきたいです。神経学的背景の理解と自分の治療を連結させて考えられるようにトレーニングしていきたいです。

今後も全国各地のセラピストと、より質の高い治療を提供するために切磋琢磨していけると考えております。